

## ハンス・キュンクにおける宗教間対話の理論の変遷 —「人間」の追求による宗教間対話—

藤本 憲正  
同志社大学大学院神学研究科博士後期課程

### 要旨

20世紀に入り盛んになった宗教間対話は、21世紀の現在でもなお取り組みが必要な課題である。グローバル化の中で、移民と在来の住民の統合、原理主義の台頭、労働者や学生の国際的移動などで、異文化異宗教間の接触と摩擦は増えている。そこで本論では、過去の宗教間対話の成果を確認して、諸宗教間の関係の在り様について整理する。その際、とりわけ、ローマ・カトリックの神学者ハンス・キュンクを取り上げる。彼は第二バチカン公会議から宗教間対話に積極的に携わり、最後には世界倫理を主張した。そして、カール・ラーナーのようにキリスト教の真理によって諸真理を包括する方法や、ジョン・ヒックのように真理を相対化する方法を一貫して批判して、「人間らしく」あることの追求を宗教間対話の基準とした。それは、世界倫理の基準として外側から宗教に求められると同時に、宗教の内側において真理の観点から基礎づけ具体化されて、社会的実践のために人々の共通の基準となる。

### キーワード

宗教間対話、ハンス・キュンク、多元主義、世界倫理、グローバル化

## **The Transition of Hans Küng's Theory for Interreligious Dialog: A Method in Perspective of Pursuing Humanity**

Norimasa FUJIMOTO

Doctoral Student

Graduate School of Theology, Doshisha University

### **Abstract:**

Since the beginning of the twentieth century, interreligious dialog has remained an important theme for theological discussion. In the globalized world, many people migrate from country to country, and encounter other religions in host countries. This can lead to conflicts between religious groups. To understand such a problem, I will conduct a brief review of the results of the theology of religions in the 20th century. I then draw on the work of the theologian Hans Küng, as he engaged in interreligious dialog leading to his declaration of “global ethic.” He criticized inclusivism like K. Rahner and pluralism like J. Hick. However, supported by Cobb Jr., Küng insisted that pluralistic religious dialog should be seen as a common search for religious truths. Moreover, Küng set “Humanism” as the criterion to criticize one another from an ethical perspective. This criterion is also a central idea of the global ethic. Using this criterion, he developed a common perspective for religions to engage in social activities harmoniously.

### **Keywords:**

interreligious dialog, Hans Küng, religious pluralism, global ethic, globalization

## 1. はじめに

20世紀に入り盛んになった宗教間対話は、21世紀の現在でもなお取り組みが必要な課題であると思われる。グローバル化の中、移民と在来の住民の統合、原理主義の台頭、労働者や学生の国際的移動などで異文化異宗教間の接触と摩擦は増えている。

そこで本論では過去の宗教間対話の成果を確認して、諸宗教間の関係の在り様について整理したい。その際、とりわけ、ローマ・カトリックの神学者ハンス・キュンク（Hans Küng, 1928-）を取り上げたい<sup>1</sup>。彼は、第二バチカン公会議から宗教間対話に携わり、さらに「世界倫理（Weltethos）」を提唱して、各宗教に固有の真理を擁護しつつ宗教の社会への参加を主張した。彼の宗教間対話の主張を理解することは有益であると思われる。というのは、宗教間の摩擦を解消するために、宗教が、それぞれの独自性を否定することなく、社会の中で積極的に活動することをキュンクは求めているからである。

キュンクの宗教間対話は、その初期の教義に関する議論から後期の世界倫理の議論へと変遷している。この変遷に関して、デイビッド・ピットマンは、包括主義から古典的な多元主義への変遷であると指摘している<sup>2</sup>。しかし、ピットマンの考察は、キュンクの世界倫理についてわずかに言及するに留まり、とりわけ「人間」を基準とする諸宗教間の関係について明白ではない。そこで、本論では、諸宗教とキリスト教との関係についてのキュンクの理解を、その初期から世界倫理の主張に至るまでの時期の範囲で追いたい。そして、包括主義や多元主義という既成の枠組みを用いてキュンクの主張を理解するのではなく、「人間」という基準のもとで諸宗教間の対話を促すという主張に、他の宗教多元主義論者とは異なる彼の特徴があることを示したい。

## 2. 宗教間対話におけるキュンクの立ち位置

宗教間対話で問題になることのひとつが、各宗教に固有の真理の相互関係をどのように理解するかという点である。この問題は宗教間対話の初期の議論にて主に取り上げられた。とりわけ、多元主義の諸々の議論のうちで、真理の扱いの違いから次の二つの立場があると過去に指摘されている。ひとつが、諸宗教の間に共通の本質を見出して、個別の真理に優越する宗教原理とする「通約的宗教多元主義」、それに対して、共通の本質を否定して諸宗教の固有の真理の多元性を強調するのが「非通約的宗教多元主義」である<sup>3</sup>。前者としては、宗教間対話を推進した中心的人物であるジョン・ヒックが著名である。彼において、諸宗教の間の壁を取り除くために、諸宗教の真理は、それぞれの絶対性が再解釈されて、ある一つの実

在に還元されている<sup>4</sup>。また、ポール・F・ニッターはキリスト教の教義を相対化したうえで、社会的解放の実践における諸宗教との対話がイエス・キリストの意味を明らかにするとしている<sup>5</sup>。

このような真理を相対化する態度に対して、キュンクは否定的である。ヒックやニッターはクレアモント会議（1986年）を開催して、イエス・キリストの唯一性を制限する試みを「ルビコン川を越える」と表現した<sup>6</sup>。しかし、キュンクはこれに反対した<sup>7</sup>。そして、後者の「非通約的宗教多元主義」に分類されているジョン・B・カブ・Jr.の主張に賛同している<sup>8</sup>。カブは諸宗教に共通の本質を認めず、諸宗教の教義の体系は橋渡し不可能だが、各宗教が対話の学びを通して自身の中に新しい側面を発見して発展すると述べている<sup>9</sup>。

また、クレアモント会議でヒックらの立場に反対したユルゲン・モルトマンは、教義に関する対話よりも、世界宗教とその共同体が有意義な対話を行う道は「倫理的実践的な橋」を架けることだと述べ、世界に宗教の一致をもたらすことは今日では形而上学的問題ではなく、全人類の平和のための政治的課題だとする<sup>10</sup>。

モルトマンのような態度は宗教間対話の展開の一つである。例えば次の指摘がある。聖典等の共通点がない場合に、真理を巡って教義に関する対話をするよりも、諸宗教が社会的な問題の解決のために倫理等の側面から参加することの方が、対話の建設的な共通基盤になるという<sup>11</sup>。また、キュンクはすでに1984年には諸宗教を研究して、世界倫理の予備的研究になる著作を発表している。

### 3. キュンクの対話理論の変遷

諸宗教との対話に関するキュンクの主張は、大きく次の4回に分けて変化している。1967年、1974年、1987年、1990年である。それぞれの年に目印となる著作を出版している。

本論では次の三つの観点からキュンクの対話の主張を分析する。すなわち、第一に諸宗教間の対話を可能にする根拠について、第二に諸宗教の地位について、第三に諸宗教に対するキリスト教の役割についてである。

#### a. 1967年：プレキリスト者と「無名のキリスト者」に対する批判

##### a-1. 対話の根拠：キリストの外に救いなし

キュンクは、1967年の「キリスト教の啓示と世界の諸宗教」にて、すでに宗教間対話の重要性を主張し、「教会の外に救いなし」ではなく「キリストの外に救いなし」であると述べている<sup>12</sup>。

キュンクは「教会の外の人間も救われる」と述べ、フィレンツェ公会議以来の

「教会の外に救いなし」という主張は、世界の諸宗教の存在について十分に神学的に考察できていないと批判する<sup>13</sup>。そして、教会の外の救いについて「基本的な神学的な解決法は、世界の諸宗教の意義を、神の普遍的な救いの計画との関連で、積極的に再評価すること<sup>14</sup>」だと述べる。すなわち、他宗教の救いに関する議論の始まりは、教会ではなく「神の救いの意志と計画<sup>15</sup>」なのである<sup>16</sup>。

キュンクによれば、聖書の神は非キリスト教に属する人間にとっても神であり、聖書における彼らへの発言は、キリスト以前の神と人との会話があることを示しているという<sup>17</sup>。それゆえ、キュンクによれば、「神と神の救いの計画の外にあるもの<sup>18</sup>」に関する問いは全く存在しないのであり、「内側のみ<sup>19</sup>」なのである。というのも、「神はすべての人間が救われ真理の知識を知ることが望んでいるからである。さらに、神と人間の間には一人の仲介者、自身を犠牲としてすべてのものにささげたイエス・キリストがいる<sup>20</sup>」からである。このようにキュンクは、非キリスト教宗教をキリスト教の神のもとに包摂して理解している。

## a-2. 諸宗教の位置：プレキリスト者

キュンクは諸宗教をキリスト教の神に包摂して理解することに加えて、それに属する人々を「プレキリスト者」と呼んでいる。「プレキリスト者」とはキリスト者ではないが、キリストに対して向けられている人々である<sup>21</sup>。

キュンクは、「プレキリスト者」の概念を、ラーナーの「無名のキリスト者」と対比して述べている<sup>22</sup>。無名のキリスト者という概念は、キリスト教の教会外の救いの可能性について、キリストを通して行われた神の自己贈与という受肉理解に基づいてキリスト教的に考察したものである。それによれば受肉はキリスト教の教会に先立って起きている。それゆえ人々がキリストを通しての神の自己贈与を受け入れて救いへと導かれるのは、教会においてだけでなく、各時代地域の文化や宗教においても可能である。そのため、他宗教や無神論は教会に属することなしに、キリスト教の救いの道であると見なされ得るのである<sup>23</sup>。

これに対してキュンクによれば、無名のキリスト者の概念は、他宗教の人々の救いを述べるに当たり相応しくないという。なぜなら、キリスト自身がキリスト教の要素を自覚しない他宗教の人々に現れることを否定していないからである<sup>24</sup>。つまり、他宗教はキリスト教の救いとしてではなく、独自の救いの道として理解されることが許されている。

しかし、人間に対する神の語りかけを真に理解しているのはキリスト教会だけであり、キリスト教会によって、他宗教はキリストに対する信仰を決断するように呼び掛けられているのである<sup>25</sup>。また、キュンクは、「私たちは、全体主義的な一つの宗教の支配に賛成するような言葉は持たない、それは自由の抑圧である

<sup>26</sup>」と述べ、さらに「真理を抑圧するような、すべての宗教を混ぜる混交主義に賛成することもない<sup>27</sup>」とも述べる。

このようにキュンクは、神の救いの計画のもとで他宗教が独自の救いの道であることを強調する一方で、神と人との関わりはキリスト教にて真に理解されているとも述べる。それゆえ、次の二点が諸宗教の救いの独自性を認めるうえで不明確である。第一に、諸宗教がキリスト教の神のもとで理解されている点、第二に、どの宗教も独自の救いの道でありながら、神についてキリスト教の教会において真に理解されるという点である。

### a-3. キリスト教の役割：諸宗教をあるべき姿に立ち直らせる宗教

キリスト教は、神の救いの計画の中で、諸宗教にどのように接するのだろうか。他宗教とキリスト教との関わりについて、キュンクは、「私たちが信じることは、世界の諸宗教にイエス・キリストの教会によって奉仕することである<sup>28</sup>」と実践を呼びかける<sup>29</sup>。その奉仕は、次の三つの点を目的としている。

(a) 教会が世界の諸宗教のために存在する一つの道は、教会が世界の諸宗教にとっての現実の状況とは何であるかを知っているということである。これは世界の諸宗教自身が知らないことである……教会が諸宗教自身の目的のために真に存在できるのは、イエス・キリストにおける信仰において、教会は世界の諸宗教を理解し、彼らの起源、進路、目的、可能性と限界、その本質と非本質を知ることができるからである。それゆえ、世界の諸宗教を知って、真に彼ら自身であることのために理解することは教会にとって賜物であるだけでなく、任務でもある。

(b) 教会と世界の諸宗教は、人間なるものの全体を共に作り上げている。人間は、全体として罪深くありながら、神の恵みを人間全体に関わることとして発見していた……教会は自身を世界の諸宗教から身を離して接触をなくし、自身の生を栄誉ある孤立の中で送ることはできない。むしろ教会は自身を世界の諸宗教に発信し、彼らに宣言し、彼らの必要と希望、進歩と再生に参加する。

(c) 教会が世界の諸宗教のために存在しているもう一つの道は、教会は彼らに対して義務を負っているということである。すなわち、もし教会が世界の諸宗教と真に繋がりを持っているのなら、このつながりは世界に対する類似した態度に限定されない。単に受動的で平和的であるにすぎない共存にはならない。共存はむしろ相互に支持する共存になる。すなわち、共にあることは、お互いのためにあることへと転換していく (WRG pp.59-61.)。

このようにキリスト教に求められるのは、他宗教が彼ら自身の本来の姿であるために貢献することである。キリスト教は、他宗教をしてその本来の姿に気づかせることができる。そして、「世界の諸宗教は、彼ら自身が知っているようがいまいが、教会の兄弟的な助けを必要としている<sup>30</sup>」のである。また、彼らに貢献する過程で、キリスト教は神の恵みを共同して発見するともいう。しかしながら、この言明において、キリスト教の他宗教への関わりは必然とされ、他宗教の意志は考慮されていない。また、他宗教の本来の姿とは、イエス・キリストへの信仰のもとで理解される姿である。したがって、他宗教の独自性を主張しながらも、キリスト教の神が他宗教にも働くことを認定するのみに終わっている<sup>31</sup>。

## **b. 1974年：諸宗教の真理のユニークさ**

1974年にキュンクは、『キリスト者であること』を出版した。また、その姉妹本として1978年に『神は存在するのか』を発表した。両書において、以前の対話の在り方とは異なり、「現実」を共有することを根拠として、諸宗教と人間主義の世界観との対話が目指されている。そして、キリスト教は諸宗教のうちの一つとして他に対して刺激を与え、人間主義を推し進める信仰であると理解されている。

### **b-1. 対話の根拠：「現実内部」における諸世界観の基礎づけ**

キュンクは、対話の相手として諸宗教だけから、宗教を持たない人間主義の世界観との対話にまで範囲を広げている。その際、非宗教者に対して語りかけるために、「信仰 (Glaube)」を「信頼 (Vertrauen)」と表現している。

信頼には「現実信頼 (Grundvertrauen zur Wirklichkeit)」と「神信頼 (Gott-Vertrauen)」の二種類がある<sup>32</sup>。これら二種類の信頼は、同一の「現実<sup>33</sup>」という世界の内部で人間が取り得る態度である。この現実とは、「人間の現実」と、より深い現実である「神の現実」をその内部に持っている。人間は現実内部で「現実信頼」を決断し、さらに「神信頼」を決断する。これら信頼を決断するのは、人間が人生の中で不確かにしか感じない意味や価値、同一性を確かにあると知るためである。現実とは、信頼の行為の際に、人間に対してその存在を示し、現実が、意味や価値、同一性を持つことを明らかにするのである。

神信頼は現実信頼によっても不確かであり続ける現実をより深く信頼する行為である<sup>34</sup>。この最も深い深みをキュンクは、「神の現実」であると述べる<sup>35</sup>。「神の現実」の点から神信頼は、人間の尊厳や自由、権利を、最も深い深みから宗教的に基礎づけ、人間や歴史の全体の意味についての問いに答えるという<sup>36</sup>。

それゆえ、神信頼は人間による現実の「ラディカルな根本的信頼<sup>37</sup>」なのであ

る。つまり、神を肯定することは「最終的に基礎づけられている根本的信頼<sup>38</sup>」であり、「神を肯定するものは、なぜ現実が信頼できるものかを知る<sup>39</sup>」のである。したがって、現実という存在自体の点で、神信仰の世界観と人間主義の世界観はその世界観の根拠を共有しているのである。

神信頼でも現実信頼と同様に、人が現実を信頼して、現実に対して自身を開くならば、現実の根拠、支え、目的を知り、さらに、その信頼の行為の最中に、信頼が最も理性的な行為であることを知る。なぜなら、現実を信頼する際に、現実が信頼の相手に対して、その最も深い固有の深みを示すからである（EG p.630.）。

キュンクの「現実（独：Wirklichkeit, 英：Reality）」という用語に対して、宗教多元主義者のヒックは「実在（the Real）」を諸宗教の対話の原理として述べている。実在とは、諸宗教の真理が持つある一つの共通の本質である<sup>40</sup>。

ヒックによれば、諸宗教は、実在についての解釈の違いとして理解される。元来は同じものであるから、諸宗教は原理的には相いれないことはなく、どれかの宗教のみが排他的で絶対的な地位にあると主張することはできない<sup>41</sup>。それゆえ、諸宗教の差異には寛容でなければならない。

たしかに諸宗教の信者は、その宗教が持つ独自性と歴史的特殊性のもとで実在者に応答すべきである。しかし、その差異は同一の実在の点から解消される。イエス・キリストもまた、唯一の救い主ではなく、実在を伝える人物の一人として理解されるのである<sup>42</sup>。

ヒックとキュンクとの違いは次の点にある。まず、キュンクでは、対話の範囲が人間主義という非宗教の世界観にまで拡大されている。そして、諸宗教は現実信頼の第一段階である人間主義を基礎づけるものとされる。第二に、現実への信頼の点で、諸宗教は同列の地位に置かれており、特定の宗教が優越することはなく、また、「現実」に還元されることもない。それゆえ、ヒックでは諸宗教の本来の姿として実在が想定される一方で、キュンクでは、諸宗教は現実の一部であると同時に人間主義の現実信頼を基礎づけるものとして理解されている。そして、ヒックでは諸宗教が持つ真理の差異が「実在」に還元されるのに対して、キュンクでは諸宗教の真理の「ユニークさ（Einzigartigkeit）<sup>43</sup>」が重視される。

## b-2. 諸宗教の位置：独自の救いの道と助けになる診断

「現実」に基づく対話の議論において、キュンクは諸宗教に対してどのような態度を取っているのだろうか。1974年の段階でキュンクは諸宗教もそれ自体独立



した救いの道であることを認めている<sup>44</sup>。しかしながら、救いの道であるからといって、諸宗教がすべて真理であるとは認めない。救いに関する問いと真理に関する問いとは別なのであり、真理の問題を回避することはできないのである<sup>45</sup>。

救いに関する問いは、真理に関する問いを余分なものにはしない。他宗教の人々も含めてすべての人間が救われると今日のキリスト教神学によって肯定されるけれども、このことはすべての宗教が同じであることを決して意味しない……諸宗教が各々において、キリスト教によって肯定される真理と類似した真理をどれだけ示していても、彼らの提示する真理はキリスト教徒にとって真理ではない……世界諸宗教との批判と自己批判の議論が求められており、その議論の基準とは、同情ではなく、真理であるのが当然なのだ。すなわち、世界諸宗教にとって試練であり、彼らを裁くのではなくて、助けになる診断である（Cs S.96.）。

キュンクによれば、キリスト教は諸宗教が救いの道であることについて無条件に認めるのではなく、キリスト教の真理に基づいて諸宗教の真理を批判することが必要である。ただし、諸宗教の真理の類似点とは似ているだけであって、個々の要素は諸宗教の教えの中でその信者のために与えられている。そのため、類似点があるからといって、キリスト教徒は他宗教の真理に対して義務を負っていない<sup>46</sup>。したがって、キュンクの他宗教の真理に関する理解は、諸宗教の持つ真理がキリスト教に根拠づけられることを目指すのではない。むしろ、キリスト教からの批判をきっかけにして諸宗教が自己を診断して、あくまで自らの真理を追求することを求めている。

### **b-3. キリスト教の役割：真理のユニークさとラディカルな人間主義**

では、キリスト教はどのような真理を追求し、またそれを基準に諸宗教を批判するのだろうか。キュンクは諸宗教に対する自身の立場を、他宗教を一切認めなかったり、部分的にだけ認めたりするような立場ではなく、「包括的なキリスト教普遍主義（ein inklusiver christlicher Universalismus）<sup>47</sup>」と述べている。

この立場ではキリスト教は、真理のユニークさの視点から批判的触媒として諸宗教の真理に影響を与える。そして、諸宗教には、キリスト教からの批判を受けて自己批判を行う自由がある。同様にキリスト教にも、諸宗教の真理のユニークな観点から批判を受けて自己批判を行う自由がある。それゆえ、諸宗教はユニークさに基づいて相互批判を行う関係である。

そして、キュンクは、ある宗教が孤立して真理を追求するのではなく、キリス

ト教と諸宗教による共同の真理の探究を目指している。それによれば、キリスト教は、相互批判をしながら諸宗教と共に未だ知られていないより大きな真理を目指す共同の探求の途上にある<sup>48</sup>。それを通して、諸宗教は、各自のユニークさに基づきつつ、互いに真正の救いの道として承認される。

それゆえ、キュンクの述べる「包括的なキリスト教普遍主義」において、キリスト教は、そのユニークさの点から、諸宗教の真理に対して一貫して真理の基準であり続ける。また、諸宗教は共に真理の共同の探求の途上にあつて、自己の真理のユニークさに基づいて相互批判するので、相互に包括的なのである。

われわれが努力せねばならないことは、諸宗教の中にいる人間に対する独立の、非利己的なキリスト教的な奉仕である……固有の信仰への確信を否定することなく、しかし、特定の返事を押し付けるのでもなく、外側からの批判を自己批判へと向け、同時に、すべてを積極的に受け入れる。また、諸宗教の価値あることを一つも破壊することなく、しかし、価値あるものを無批判に自分のものにするのでもない……キリスト教は世界諸宗教の中で、その宗教的、倫理的、仲介的、修道士的、審美的価値の批判的な触媒として、および結晶化する点として、その奉仕を遂行するべきである<sup>49</sup> (Cs S.104.)。

キュンクによれば、キリスト教のユニークさは、真の神であり人間であるイエス・キリストである<sup>50</sup>。根本的模範であるキリストに倣うことで、キリスト教徒は実践的にラディカルな人間主義の実現に至る<sup>51</sup>。イエス・キリストを根本的に信頼することは、「現実」の内部にて諸宗教の中の一つとして、人間の現実への信頼を神の現実の深みから根本的に基礎づけることなのである。それゆえ、キリスト教は、人間や人生の負の面においても人間を支える真のラディカルな人間主義の実現を可能にするとともに、諸宗教や無神論を支援するのである<sup>52</sup>。

### c. 1987年：エキュメニズムの基準学

キュンクは、真理のユニークさに基づく諸宗教の相互批判を主張した。しかし、次の二点が疑問として挙げられる。まず、諸宗教の真理の間で行われる相互批判と、人間主義の世界観に対するキリスト教によるラディカルな人間主義の推進との二つはどのような関係にあるのだろうか。第二に、諸宗教は自らのユニークさを直接に他の宗教に適用して相互批判するのだろうか<sup>53</sup>。

1987年の著作『新しい出発点にある神学』にてキュンクは、これらの問題を整理して、対話のための基準作りをしている。それに関連して、「エキュメニズムの基準学」や「外側と内側の視点」、「真理の共同の探求」などのキーワードを

用いている。ただし、宗教間対話の根拠に関しては「現実」自身による基礎づけという前回の考えが維持されている<sup>54</sup>。したがって、以下の議論では対話の根拠について論じない。

### c-1. 諸宗教の位置 1 : エキュメニズムの基準学

キュンクは、エキュメニズムの意味を、キリスト教の諸教派の合同だけではなく、諸宗教との協働の意味で用いている<sup>55</sup>。そして、諸宗教は次の二つの基準によってそれぞれの独自性を維持しつつ、相互に批判して共同の真理の探究や実践での協働が可能になる。

その基準とは、第一に、「人間」である。この基準は「あらゆる人間に課されている人間らしさ<sup>56</sup>」という「一般的な倫理的基準<sup>57</sup>」を要請する。第二に、「一般的な宗教の基準<sup>58</sup>」である。これは諸宗教の教えや実践に、どのような場合であっても中心となる重要な形態である。すなわち、キリスト、ムハンマド、仏陀などである<sup>59</sup>。この二つの基準から成るのが「エキュメニズムの基準学 (Ökumenische Krieteriologie)」である<sup>60</sup>。この方法によって諸宗教は真理について相互に学びあう。また、社会的実践においては倫理の点から相互批判する。

まず、人間らしさという基準が諸宗教に求められるのは、諸宗教の相互批判の際に聖書を直接に真理の基準に用いることは適切ではないからである<sup>61</sup>。なぜなら、人間らしさの重視は、宗教的非宗教的を問わず、諸倫理の基礎として見なされており、現代の社会において見逃すことはできないからである。また非人間的な面は、諸宗教においても非難され改善されることが求められているという。その例として 1948 年の国連人権宣言や、1970 年の京都での第一回世界宗教者平和会議の宣言が挙げられている<sup>62</sup>。

キュンクによれば、この人間らしさの意味は、「人は非人間的にではなく、人間らしく生きるべきであり、自身の人間存在をあらゆる点から実現すべきだ<sup>63</sup>」というものである。そして、その実現に役立つことが善いことである<sup>64</sup>。この基準にしたがって、諸宗教は以下の通りにその善悪が区別される。

- a) 肯定的判断 : ある宗教が人間らしさに役立つかぎりで、すなわち、その信仰と倫理の教え、儀式と制度の点で、人間に対して、人間らしいアイデンティティ、意味や価値があることを促し、人間に意味深く実り多い実存を勝ち取らせるかぎりで、その宗教は真で善い宗教である。
- b) 否定的判断 : ある宗教が人間らしくないことを広めるかぎりで、すなわち、その信仰と倫理の教え、儀式と制度の点で、人間に対して、人間らしいアイデンティティ、意味や価値があることを妨げ、人間に意味深く実り多い実

存になり損なうことを助長するかぎり、その宗教は誤った悪い宗教である (TA S.293.)。

次に各宗教に固有の基準である。この基準はキリスト教にとっては、聖書に証言されているイエス・キリストである。この基準にしたがっているかぎり、キリスト教は真で善くあることができる。しかしキュンクがこの基準を直接用いるのは、キリスト教に対してのみである。したがって、この基準は、どれほどキリスト教がキリスト教的であるかという自己批判のための基準である。そして、他宗教に対しては、同様の基準は間接的にしか用いられない。すなわち、諸宗教の中にどれほどキリスト教に類似しているものが見出されるのかという、諸宗教についての批判的解明のために用いられる<sup>65</sup>。

以上のように、キュンクのエキュメニズムの基準学とは、諸宗教に共通の人間らしさという基準と各々の宗教が持つ固有の基準から成ることが分かる。この基準学では、諸宗教は固有性を直接に他宗教に適用して相互批判をしない。むしろ、この共通の基準に基づいて、それに貢献するか否かで評価される。そして、諸宗教は、固有の真理を基準にして自己批判を行う。その基準に沿うかぎり、その宗教は真であり善いのである。そしてこの基準は、他宗教を批判するためではなく、自身の内容が他宗教にも有効であるかどうかを発見するために用いられる。したがって、この基準学では人間らしさという共通の評価基準と、諸宗教が持つ固有の真理という多数の評価基準があることになる。

## c-2. 諸宗教の位置 2：内側と外側の視点

一つの共通の基準と、複数の固有の真理があることについて、キュンクは内側の視点と外側の視点をを用いてその関係を整理している。

外側の視点はいわば「宗教学的」な視点であり、信仰者は自らの信仰する宗教を絶対視する立場を留保して、諸宗教を観察する<sup>66</sup>。それによって得られるのは、救いの道として真なる宗教が複数あることを認める態度である。その結果、様々な宗教学的真理を前にして、排他的な態度が放棄される<sup>67</sup>。

一方、内側の視点とは自らの信仰に基づく視点である。ここでは外的視点と違って、真なる宗教は一つしかない。すなわち、自身の信仰は自身にとって真なる宗教なのである。ただし、自身の宗教が真なるものであることは、他宗教が真であることを排除しない。なぜなら、ここでの真理とは一般的な真理ではなく、「実存的な真理」が問題になっているからである<sup>68</sup>。実存的な真理とは、固有の人生と経験の歴史に制限された「私」にとっての真なるものである。すなわち、信仰者は自身の宗教の中に、その人生と死にとっての真理を発見したと信じるのであ

る<sup>69</sup>。

このことから、内側の視点では自己の宗教は自身にとって絶対的な真理である一方で、外側の視点ではその絶対性と対立することなく、他の人々にとっての真なる諸宗教を認めることになる。この二つの視点によって、諸宗教が持つ複数の真理についての学びあいが可能になる。

この学びあいの方​​法について、キュンクは「創造的な変化の道」と述べて、多元主義の論者であるカブを支持している<sup>70</sup>。カブは対話の際に真理を相対化することを非難して、対話とは次のものだ​​と述べる。すなわち、他宗教から学ぶこと​​によって自身の生をより豊かにし、その伝統の中で「真実で価値有ると自負するもの<sup>71</sup>」を対話の相手に提示し、彼らがより成長するように促すことである。この対話は、「相互変革の志<sup>72</sup>」であるという。それゆえキュンクは人間らしさという倫理的な側面​​で諸宗教の相互批判を目指し、さらに真理の側面では、自己の基準を直接に他宗教に用いる批判ではなく、自己変革の学びあいを主張している。

### c-3. キリスト教の役割：「人間らしさ」を推進するキリスト教

宗教学的な視点と実存的な視点とはどこまで一致しているのだろうか。それとも、二つの視点はどこまでも分離したままであるのだろうか。キュンクによれば、イエス・キリストに倣うことは人間らしさをラディカルに推進することだった。そのため、人間らしさという宗教学的な基準は実存的な基準であるキリスト教の本来の教えに沿うものである。

キリスト教信仰にとって、キリスト教に特有の基準は、各宗教の根源に基づくという宗教に関する一般的な基準だけでなく、最後には、人間という一般的な倫理の基準との一致に達する……というのも、神の意志と神の国の述べ伝えの帰結であり、イエスの振る舞いの全体である山上の説教は、なにを目指しているのだろうか。それは、ある新しい真の人間性にほかならない……この新しい真の人間性が意味するものは、敵とでさえ連帯する同朋であることにおいて明らかになるラディカルな人間性である。現実の真の人間であるイエスという点から、山上の説教のこのラディカルな人間性は、他宗教の人々とも連帯する同朋であることとして実現されることができよう（全く異なる世界理解を今日ま​​えにして）……すなわち、キリスト教はより人間らしくあるほど、キリスト教らしくあり（山上の説教の精神で）、よりキリスト教らしくあるほど、ますます外側から真の宗教として見えるのである（TA S.303-304.）。

このように、キュンクによれば、キリスト教であることはラディカルに人間らしくあることなのである。それゆえ、人間らしくあることを推し進めるほど、キリスト教はますますキリスト教らしくなる。そして、人間らしさという基準も基礎づけ満たすことになるので、諸宗教の側からも、キリスト教は善い宗教であり、また真なる宗教に見えるのである<sup>73</sup>。しかしながら、キリスト教は人間らしさを推進するとしても、諸宗教にはどのような関係が人間らしさとの間にあるのだろうか。さらに、諸宗教はどのようにして協働して人間らしさを実現するのだろうか。

#### **d. 1990年：世界倫理**

1987年の段階では、人間らしさの基準とは「一般的な倫理基準」とされ、諸宗教がどのようにして協働してその倫理を支持するのか明確ではなかった。その答えをキュンクは、1990年の段階で述べている。すなわち、外側の宗教学的な視点を拡大して、人間らしさという基準を「世界倫理」にまで高めて主唱した。それを根本的合意にして、諸宗教は宗教を持たない人々と共に社会に参加することが目指されている。

##### **d-1. 諸宗教の位置 1：最低限の合意と世界倫理**

キュンクによれば、世界倫理には宗教のあるなしにかかわらず、すべての人類に対して、市民社会の中で達成されるべき倫理に関する最低限の合意が説かれている。諸宗教は外側の視点から観察してこの最低限の合意点を発見する。

諸宗教の世界はいわば外から観察されることができる。この視点（宗教学的な視点）では、ある一つの目的に向かう様々な救いの道がある。すなわち、多くの真なる宗教は、お互いに豊かにしあい、補完しあうことができる。そして、倫理におけるあらゆる教義的な違いにもかかわらず、共通の価値、基準、基本態度に関する最低限の値を示す。世界倫理は、発明されるのではなく、見つけられなければならない（DC S.897.）。

世界倫理は宗教的基礎づけが与えられており<sup>74</sup>、宗教者から提示されるものである<sup>75</sup>。しかし、同時に非宗教者とも共有することが目指されている<sup>76</sup>。キュンクによれば、「宗教の古来の知恵が、未来への道を示す<sup>77</sup>」ことを信じて、宗教者は宗教の視点から、人類の平和と地球の保全のために世界倫理を提供する<sup>78</sup>。すなわち、ヘルマン・ヘーリングの指摘によれば、世界倫理は人間性の生き残りのための試みであり、世界の諸宗教は非宗教の人々と協力して、その試みのための

傑出した担い手になることができる<sup>79</sup>。

#### **d-2. 諸宗教の位置 2：根本的一致点としての「人間」**

では、外側の視点から得られる最低限の合意とは何であろうか。その答えをキュンクは、前述のエキュメニズムの基準学の通り「人間（der Mensch）」という「根本的一致」の基準だとする<sup>80</sup>。

この人間像は、宗教のない人間主義の世界観と宗教に基づく世界観とによって支えられる一方で<sup>81</sup>、ここで「人間」が意味していることは、特定の倫理観に基づくものではない。むしろ、どの倫理観からも求められる、特定の倫理観に依存しない独立した人間像である<sup>82</sup>。

そもそもこの基準は実践的に実現することが目指されており、政治経済の分野に取り組むことが意図されている。社会のより良い未来と現在のために倫理が必要だと考える人々には、「どのような基礎的条件のもとで、人間として居住可能な地球の上で生き延びることができるのか、また、個人的なそして社会的な人生を人間的に作る事が可能なのか<sup>83</sup>」を探求する義務がある。

そのために、人々は人間であることの意味を問い、「より人間らしくあらねばなら<sup>84</sup>」ず、その「人間らしさの可能性を可能なかぎり人間的な社会と健全な環境のために<sup>85</sup>」、これまでとは異なって利用しつくさねばならないのである。したがって、キュンクによれば、世界倫理では、様々な世界観との間で根本的に共有される、「人間<sup>86</sup>」が第一の基礎的原理になる。

#### **d-3. キリスト教の役割：諸宗教との協働による「人間」の実現**

前述のように、キリスト教においては、キリスト者であることを突き詰めることはラディカルな人間主義を推進することであるため、内側と外側の視点に矛盾はないとされた。そして、倫理の点から他宗教と共通の基準を持ち、世界倫理を具体化し深めることが期待された。

他宗教の場合も同様である。まず、人間らしさという基準はキリスト教と同様に、「神の現実」のうちの一つである諸宗教によっても基礎づけられる。また、世界倫理は宗教の統合や解体ではなく<sup>87</sup>、諸宗教に共通している最低限のものである。そのため諸宗教の内側の視点からもまた、世界倫理をその信仰の独自の視点から基礎づけ深めることができる。

・真の人間らしさは、「真の宗教」の前提である……すなわち、人間性（人間の尊厳と基礎的価値の観点から見た人間性）は、各々の宗教に対する最低限の要求である。少なくとも人間性（最小限の基準）は、人間が真の宗教性

を実現したいと望むところでは、存在しなければならない。

・真の宗教は、真の人間らしさの完成である……すなわち、宗教（最も高い価値、無条件の義務に関する包括的な意味の表現としての宗教）は、人間性の実現にとって最善の前提である。まさしく宗教（最大限の基準）は、人が無条件にそして普遍的な義務として人間性を真に実現し具体化しようとしているところでは、存在しなければならない（PW S.121.）。

したがって、人間であることは、一方で一般的な倫理の基準である外側の視点から宗教に対して要求される。人間であることは、宗教が本来の姿であるために必要な前提の一つなのである。他方で、諸宗教によって内側の視点からよりよく実現される。

キュンクによれば、この人間らしさの基準は、諸宗教において黄金律として具体化されている。つまり、「すべての人間は人間らしく扱われなければならない<sup>88</sup>」という根本的要請である。

その根本的要請は、人間の「互惠性（Reziprozität）」または、「相互性（Gegenseitigkeit）」と解釈されて、人間であることのための第二の基礎的原理であるとされる<sup>89</sup>。そして、外側の宗教学的な視点から非宗教者を含む社会に対して、次の4か条のかたちで宣言される<sup>90</sup>。すなわち、1. 「非暴力と生命の尊重の文化への義務<sup>91</sup>」、2. 「連帯の文化と公正な経済秩序への義務<sup>92</sup>」、3. 「寛容の文化と誠実に生きることへの義務<sup>93</sup>」、4. 「男女の同権と協力の文化への義務<sup>94</sup>」である<sup>95</sup>。

以上のように、「エキュメニズムの基準学」が世界倫理へと発展したことが分かる。まず、一般的な倫理の観点から「人間」という基準がある。これは外側からの宗教学的な視点から設定される基準である。そして、この基準は、諸宗教が一般社会に対して共同で参画するための倫理宣言にまで引き延ばされた。また、諸宗教は世界倫理によって取り換えられるのではないが、人間らしく変わることが求められた<sup>96</sup>。さらに、もう一方の諸宗教に固有の基準は、各々の宗教にて世界倫理を基礎づけ深めるものと理解された<sup>97</sup>。具体的には、世界倫理とは諸宗教が持つ黄金律の再解釈であり、内側と外側の両方の視点に基づいて諸宗教が政治経済分野に参加することが目指された<sup>98</sup>。

#### 4. おわりに

本論では、キュンクの宗教間対話の主張がどのように変遷してきたかを論じた。その結果、次のことが明らかになった。まず、キュンクは1967年には「無名のキ



リスト者」を批判して諸宗教の救いがキリスト教とは別個のものであることを強調するものの、その個性はキリスト教が認める範囲に留まっていた。第二に、1974年にはユニークさに基づく諸宗教の相互批判を唱え、また非宗教的な人間主義の世界観にまで対話の範囲を拡大した。これがその後の対話理論の基礎になった。しかし、キュンクはこの時点では、諸宗教が自身の真理を直接に他宗教の批判の基準とすると考えていた。第三に、1987年では固有の真理の代わりに、人間らしさという共通の倫理基準と各宗教固有の真理の基準という二つの基準からなる「エキュメニズムの基準学」を唱えた。その共通の倫理の基準から諸宗教は批判しあい、真理に関しては相互に学びあうことを目指した。最後に、共通の倫理の基準を拡大して世界倫理を主唱し、「人間」を最低限の合意として諸宗教が共同して社会の倫理的実践に当たることを述べた。そして、固有の基準は各宗教において世界倫理を基礎づけ深めるものとされた。

結果として、真理の相対化を一貫して批判したキュンクの宗教間対話が至ったのは、「人間らしく」あることの追求である。それは倫理の基準として宗教に求められると同時に、宗教が内側の真理の点から基礎づけ深めて、社会的実践のために人々に共通の倫理基準となるのである。今後は、世界倫理の政治経済への適用がどのように宗教の公共性と関連して運用されているのかを取り上げて、キュンクの対話に関する主張が持つ独自性と課題を検討したい。

## 註

<sup>1</sup> 本論では、以下の略称をもってキュンクの著作を表記する。

K: Die Kirche, Freiburg/Breisgau: Herder KG, 1967. (邦訳『教会論』上・下、石脇慶総・角田信三郎訳、新教出版社、1977年)。

WRG: “The World Religions in God’s Plan of Salvation” ed. by Joseph Neuner. *Christian Revelation and World Religions*. London: Burns & Oates, 1967.

Cs: Christ sein, München: Piper, 1974.

EG: Existiert Gott?, München: Piper, 1978.

CW: Christentum und Weltreligionen. Hinführung zum Dialog mit Islam, Hinduismus, Buddhismus, München: Piper, 1984.

TA: Theologie im Aufbruch. Eine ökumenische Grundlegung, München: Piper, 1987.

PW: Projekt Weltethos, München: Piper, 1990.

DC: Das Christentum, München: Piper, 1994.

WG: Was ich glaube, München: Piper, 2009.

EM: Erlebte Menschlichkeit Erinnerungen, München: Piper, 2013.

EW: H. Küng, K.-J. Kuschel (Hrsg.), Erklärung zum Weltethos, München: Piper, 1993. (邦訳『地球倫理宣言』、吉田収訳、世界聖典刊行協会、1995年)

<sup>2</sup> David Pitman, *Twentieth Century Christian Responses to Religious Pluralism*, Farnham: Ashgate, 2014, pp.143-158.

また、本論で述べるのと同様に、ジョン・ヒックもキュンクの立場の変化を指摘している。初期には包括主義の立場を取っていたが、その後、『キリスト者であること』にて、多元的な宗教間対話に進んだとしている（ヒック、『神は多くの名前を持つ』、間瀬啓允訳、岩波書店、1986年、106-107頁、および、ヒック、『もうひとつのキリスト教』、間瀬啓允、渡部信訳、日本基督教団出版局、1989年、129頁）。ヒックとピットマンの違いは、取り上げている著作の範囲である。ヒックは、『キリスト者であること』（Christ sein）までだが、ピットマンは『新しい出発点にある神学』（Theologie im Aufbruch）まで言及して論じている。

<sup>3</sup> 根岸敏行、『宗教多元主義とは何か』、晃洋書房、2001年、32-34頁。

<sup>4</sup> ヒック、『宗教が作る虹』、間瀬啓允訳、岩波書店、1997年、39-42頁。

<sup>5</sup> ポール・F・ニッター、「解放の神学の視点から宗教の神学を建設するために」、ヒック、ニッター、『キリスト教の絶対性を越えて』、八木誠一訳、1993年、春秋社、372-384頁。

<sup>6</sup> ヒック、ニッター、『キリスト教の絶対性を越えて』、5頁。

<sup>7</sup> EM S.202-203.

<sup>8</sup> PW S.134 にて言及している。

<sup>9</sup> ジョン・B・カブ・Jr.、『対話を超えて：キリスト教と仏教の相互変革の展望』、延原時行訳、行路社、1985年、92、96-97頁。また、ニッターは、1993年の著作にて同様のことを指摘している（ニッター、前掲書、358-359頁）。

<sup>10</sup> ユルゲン・モルトマン、「多元主義神学は宗教間対話に有効か」、ゲイビン・デコスタ編、森本あんり訳、『キリスト教は他宗教をどう考えるか』、1997年、教文館、208-210頁。

<sup>11</sup> 星川啓慈・山梨有希子編、『グローバル時代の宗教間対話』、2001年、大正大学出版会、132頁、145-147頁。

<sup>12</sup> WRG p.31.

<sup>13</sup> Ibid. p.30.

<sup>14</sup> Ibid. p.36.

<sup>15</sup> Ibid. p.46.

<sup>16</sup> キュンクは、『教会論』においても同様のことを述べている（K S.378. 邦訳、下巻、93頁）。

また、「教会の外に救いなし」という命題を維持するために、教会の概念を拡大して、善意を持つ人々はカトリック教会に属するとすることは誤りだとする。というのも、キリストを信じる人々の共同体という教会理解を毀損するからである（K S.375-376. 邦訳、下巻、89-90頁）。

<sup>17</sup> 救いの意志と計画に関して、キュンクは以下のように述べている。

1. 新旧約聖書に亘っている普遍主義の観点から、聖書は他宗教に対して純粋に否定的で不寛容な態度を取っているという考えを主張することは不可能である。

- 
2. 聖書の神はユダヤ教とキリスト教の神だけでなく、すべての人間の神であることは明らかである。
3. 異教世界の過ち、無知、虚偽、罪に関する否定的な発言は、神の救いの意志に反してなされている範囲内で言及されている。これら否定的発言は断罪の決定的な宣告と理解されるのではなく、今日の異教に向けられた回心の呼びかけと理解されるべきである。
4. 異教についての積極的な発言は、人間全体に対する神の原初的な会話があることを示している……それゆえ、彼らがキリストの福音に出会う前でさえ、すでに異教の人々とともに神はいたことの歴史がすでに存在する (WRG p.45-46.)。
- <sup>18</sup> WRG p.46.
- <sup>19</sup> Idem.
- <sup>20</sup> Idem.
- <sup>21</sup> Ibid. p.55.
- <sup>22</sup> 無名のキリスト者について、カール・ラーナー、『キリスト教とは何か』、百瀬文晃訳、エンデルレ書店、1981年、229-231頁。また、マクグラスは、ラーナーにおいては、神の啓示に関しても救いに関しても包括的であると指摘している (A・E・マクグラス、『キリスト教神学入門』、神代真砂実訳、教文館、2002年、273-274頁)。
- <sup>23</sup> 高柳俊一、「カトリックの『諸宗教の神学』の形成と展開」、『日本の神学』22号、日本基督教学会、1983年、34-60頁。
- <sup>24</sup> WRG p.55.
- <sup>25</sup> Ibid. p.56.
- <sup>26</sup> Ibid. p.57.
- <sup>27</sup> Idem.
- <sup>28</sup> Idem.
- <sup>29</sup> キュンクは、『教会論』においても同様のことを述べている (K S.378. 邦訳、下巻、93頁)。
- <sup>30</sup> WRG p.61.
- <sup>31</sup> カブもまた、同様のことを指摘している。キュンクは、対話に積極的であっても、他宗教に開かれて自身が変わることよりも、どの程度まで他宗教にキリスト教の神が働いているかを判定することに重点があるように見えるという (カブ、『対話を超えて：キリスト教と仏教の相互変革の展望』、82-83頁)。
- <sup>32</sup> EG S.627-629.
- <sup>33</sup> 「現実」の議論でキュンクは「相関の方法」を発展させている (Francis S. Fiorenza (eds.), *Systematic Theology: Roman Catholic Perspectives*, Vol.1, Minneapolis: Fortress Press, 1991, pp. 55-59.)。キュンクは、人間の経験とキリストの福音の関係を『神は存在するのか』(1978)にて集中的に議論している。それによると、人間の倫理と神の倫理の相関関係は「現実」の内部で現実自身によって基礎づけられ、神の現実は、同じ現実の内部で、より深い現実として人間の現実を支えるとされている。また、『キリスト者であること』(1974)の議論では、キリスト者であることは、「現実」の内部で、人間で

あることと矛盾しない。むしろ、イエスに倣うことを通して、キリスト者は触媒となつて、人間であることをラディカルに推し進めるとされる。これに基づいて、キュンクは自身をキリスト教徒であり、ヒューマニスト (Humanist) であると理解していると述べる (WG S.88.)。

<sup>34</sup> EG S.628-629.

<sup>35</sup> Ibid. S.630.

<sup>36</sup> PW S.75-79, S.81-83.

<sup>37</sup> EG S.628.

<sup>38</sup> Idem.

<sup>39</sup> Idem.

<sup>40</sup> ヒックは次のように述べている。

多元主義は、偉大な世界宗教はどれでも〈実在者〉なり、〈究極者〉なりに対する様々な覚知と概念、またそれらに応じた様々な応答の仕方を具体化し、加えて、その各々の伝統内において〈自己中心から実在中心への人間存在の変革〉が明確に生じつつある——人間の観察の及ぶかぎり、ほぼ同程度に生じつつあるものといえる——と見なす見解のことである。したがって、偉大な宗教的伝統はそれぞれ代替的な救いの「場」、あるいは救いの「道」と見なすことができる。そしてこの場なり、道なりに沿って、人は救い・解放・悟り・完成に達することがきる (ヒック、『宗教多元主義』、間瀬啓允訳、法蔵館、1990年、74頁)。(原著では、36-37頁。John Hick, *Problems of Religious Pluralism*, New York: St. Martin's Press, 1985.)

<sup>41</sup> ヒック、『宗教が作る虹』、75-77頁。

<sup>42</sup> ヒック、『宗教多元主義』、3頁。

<sup>43</sup> Cs S.96.

<sup>44</sup> キュンクは、本書でも引き続いて「無名のキリスト者」を批判している。他宗教の救いの独自性をキリスト教に基礎づけて理解するのではなく、キリスト教とは別の救いの道として認めることを主張している。前者のような理解は、世界諸宗教の挑戦を真剣には受け止めていないため、キリスト教の価値を容易にヒューマニズムと同等にしたり他宗教の一部にしたりしてしまう危険があるという (Cs S.89-90.)。

<sup>45</sup> キュンクは、他宗教に対する以下のような6つの態度を否定する。

1. 固有の真理を絶対として他宗教の説く真理から引き離すような絶対主義、2. 他の宗教とその真理全体を断罪する排他主義、3. 自身の宗教を初めから他よりも優れたものとする優越主義、4. すべての真理を相対化して、あらゆる価値や基準に対して無関心である相対主義、5. 自己と他の宗教におおざっぱに同意して有効と認め、自己の宗教においても、また他宗教においても、それらが持つあらゆる真理にもかかわらず含んでいる不真理に対して注意を払わない恣意的な多元主義、6. 一部の極端な立場や決定を批判から除外し真理に関する問いを不問にするか軽視する宗教的無関心主義 (CW S.21-22.)。

<sup>46</sup> Cs S.96.

<sup>47</sup> Ibid. S.104.

---

<sup>48</sup> Ibid. S.107.

<sup>49</sup> この部分の翻訳は一部を以下の著作に負っている。古屋安雄、『宗教の神学』、ヨルダン社、1986年、280頁。

<sup>50</sup> Cs S.439-440. この箇所でキュンクは、史的イエスを踏まえて、イエスが神であり人間であることを下からのキリスト論の視点から再解釈している。

<sup>51</sup> Ibid. S.542-543.

<sup>52</sup> Ibid. S.594.

<sup>53</sup> 古屋は、「包括的なキリスト教普遍主義」を取り上げて、キュンクは、宗教間対話において真理の問題をおざなりにせず、それが最も重要な点であることを指摘したと述べている（古屋安雄、『宗教の神学』、280頁）。また、岩島忠彦によれば、キュンクもまた、対話において「キリスト教の最終性・絶対性を固持」し、どの宗教・哲学も最後はキリストを目指しているという（岩島忠彦、「諸宗教の神学によせて」、上智大学神学会、『カトリック研究』、49号、昭和61年、157-190頁、とくに165-167頁）。しかし、前述のように、1974年の時点でキュンクが目指すのはユニークさに基づく相互批判であり、最終的にキリストを目指しているとはしていない。しかし、キリスト教の基準を直接に他宗教に用いるため、どこまで他宗教の真理の独自性を保障しているのかははっきりしない。

<sup>54</sup> TA S.242-245.

<sup>55</sup> CW S.16.

<sup>56</sup> TA S.294.

<sup>57</sup> Idem.

<sup>58</sup> Ibid. S.296.

<sup>59</sup> Idem.

<sup>60</sup> Ibid. S.274.

<sup>61</sup> Ibid. S.288.

<sup>62</sup> Ibid. S.291-292.

<sup>63</sup> Ibid. S.292.

<sup>64</sup> Idem.

<sup>65</sup> Ibid. S.298.

<sup>66</sup> Idem.

<sup>67</sup> Idem.

<sup>68</sup> Ibid. S.299.

<sup>69</sup> Ibid. S.300.

<sup>70</sup> PW S.134.

<sup>71</sup> カブ、『対話を超えて：キリスト教と仏教の相互変革の展望』、96頁。

<sup>72</sup> 前掲書、97頁。

<sup>73</sup> キュンクは、ラディカルな人間の実現を『キリスト者であること』にてすでに述べている。しかし、この時は「人間」の基準と固有の基準を明確に分けておらず、キリスト教がラディカルな人間の実現を通して他宗教に直接刺激を与えるとしている。

<sup>74</sup> EW S. 68. (邦訳 73頁)。

- 75 世界倫理宣言では、仏教を配慮して神という用語の使用が避けられている (Ibid. S.69-75. 邦訳 75-80 頁)。
- 76 Ibid. S.42. (邦訳 38 頁)。
- 77 Ibid. S.21. (邦訳 16 頁)。
- 78 Ibid. S.21-24. (邦訳 15-18 頁)。
- 79 Hermann Häring, Hans Küng: *Grenzen durchbrechen*, Mainz: Matthias-Grünewald-Verlag, 1998, S.320.
- 80 PW S.53.
- 81 Ibid. S.61.
- 82 キュンクは次のように述べている。  
 「人間らしさ」でもって、ある特定の「人間像」が意図されているのではない。「人間像」は、つねにある特別な視点から構想されている——たとえばキリスト教の、ユダヤ教の、もしくはイスラームの、社会主義の、自由主義の、生物学的な、経済学的な人間像である。そして人間像はしばしばお互いに対立しあう。しかしここで、「人間らしさ」は、諸々の価値、基準についてのある倫理的な根本的要素を意味しており、その根本的要素は、各々の人間像から独立してあらゆる人間に望まれているものである (WG S.86-87.)。
- 83 Ibid. S53.
- 84 Idem.
- 85 Idem.
- 86 WG S.86.
- 87 Ibid. S.134. 世界倫理は諸宗教の解体や統合を意図しているのではなく、倫理に関する根本的な意見の一致であることをキュンクは強調している (EW S 24. 邦訳 18 頁)。
- 88 EW S.25. (邦訳 19 頁)。
- 89 WG S.88-89.
- 90 ニッターは、キュンクに刺激を受けて、「宗際倫理 (interfaith ethic)」の必要性を訴えている (Paul F. Knitter, “Responsibilities for the Future: Toward an Interfaith Ethic,” in John D’Arcy May (ed.), *Pluralism and the Religions: The Theological and Political Dimensions*, London: Cassell, 1998, pp.75-89.)。
- 91 EW S.29. (邦訳 22 頁)。ただし、4 か条の翻訳は邦訳を参考にして論者が行った。
- 92 Ibid. S.31. (邦訳 25 頁)。
- 93 Ibid. S.35. (邦訳 29 頁)。
- 94 Ibid. S.38. (邦訳 33 頁)。
- 95 この4 か条は、それぞれ主に次のように説明されている。1. 殺すな、積極的な言葉では、生命を尊重せよ。2. 盗むな。積極的な言葉では、正直に公正になせ。3. 嘘をつくな。積極的な言葉では、真実に話し、行え。4. 性的不道徳を犯すな。積極的な言葉では、お互いを尊敬し愛せ (Ibid. S.29-38. 邦訳では 22-33 頁)。
- 96 キュンクによれば、「人間」という基準は、1948 年に国連で採択された世界人権宣言を支持するものである。この宣言は、加盟国が人権と自由を擁護するように求めている

る。しかし、キュンクによれば、世界倫理と世界人権宣言の違いは次の点にある。すなわち、世界倫理は、宗教的にも基礎づけられて世界人権宣言の述べる条文を守ろうとする態度を生み出すような、より深い水準について言明するという。というのは、この水準について、キュンクによれば、ドイツ語の「倫理 (Ethik)」と「習俗 (Ethos)」の区別があるからである。後者は、各々の倫理・哲学的理論 (前者) を支える基礎的態度である。したがって、世界倫理は、世界人権宣言とともに、人間という基本的価値を共有している点で同様であるが、人間に倫理的態度を養成する点に強調点がある。このギリシャ語の意味を含んでいるドイツ語の Ethos を翻訳する際にキュンクは工夫が必要だったという。また、ドイツ語の「Welt (世界)」の翻訳も工夫が求められた。翻訳作業の結果、英訳では Ethos の意味を持つ「倫理 (ethic)」であって Ethik の意味を持つ「諸倫理 (ethics)」ではないことになった。そして world よりも global が選ばれて「global ethic」に定まった。ただしキュンクは「world ethic」でも構わないという (Ibid. S. 68-69. 邦訳 73-74 頁)。

<sup>97</sup> キュンクは、キリスト教の福音と人間の経験との関係を巡るエドワード・スヒレベークスとの議論において、その関係は、相互批判ではなくて、福音をより深い根拠とする批判的対決だと述べている (Leonard Swidler, Hans Küng, "Toward a "universal declaration of global ethos", in *Journal of Ecumenical Studies*, 28,1 (1991), pp.15-17.)。

<sup>98</sup> 1997年にキュンクは、『世界政治・経済のための世界倫理』 (Weltethos für Weltpolitik und Weltwirtschaft, München: Piper, 1997.) などを出版して、世界倫理の概念を拡大している。